

コロナ禍、飼料高下での和牛肥育経営

株式会社 佐賀牛宮崎牧場 代表取締役 宮崎陽輔

株式会社宮崎牧場は、佐賀県の西北部、唐津市鎮西町で和牛の肥育経営(飼養頭数黒毛850頭)をしています。

私は2000年に親元就農し、飼養頭数は黒毛300頭規模で、肥育技術や経営管理などを一から勉強していきました。2010年に経営移譲を受けました。当時の飼養規模は黒毛750頭と就農後に規模は拡大しましたが、肥育成績は芳しくなかったです。翌年JAの勧めで経営診断を受診したことで、経営を見直すきっかけとなり、現在に至るまでの経営基盤を作ることができたと考えています。

特に思い出されるのが、経営診断を受けるなかで、経営内容を数字で見て衝撃を受け、経営に対する意識を変えざるを得なかった点です。経営内容の至る所に所得のロスにつながるところが多く、経営管理が上手くいっていないと痛感しました。

そこで、様々な経営改善に取り組んできました。いくつか具体的に紹介しますと、まず1日増加額をアップするために、死亡事故頭数を減らすことと、肥育成績(特に増体量と枝重量のバラツキ)の改善に取り組むようにしました。肥育もと牛は全て市場から導入していますが、自経営の肥育成績のデータと、肥育管理に最も適した肥育もと牛の産地や血統・発育状態を独自に集計・分析しながら、導入するようにしました。さらに、導入したもと牛ごとに、出荷時の肥育牛の肉質などの肥育成績イメージと、実際の出荷時の肥育成績を比較することで、もと牛の目利き力の向上にも努めてきました。

肥育成績の向上のためには、従業員とのコミュニケーションが重要と考え、毎日の休憩時間を「お茶の時間」とし、出社従業員全員と団欒することで、飼料給与量の調整、飼育管理の進捗や飼育牛の状況について共有してきました。こうした取り組みの結果、肥育牛の事故率は、就農当時の3.1%から2019年の1.1%へと低下することができました。

昨年来、配合飼料価格が高騰していますが、2006年頃にも配合飼料価格の高騰がありました。その際、JAからつ肥育部会で配合飼料の銘柄集約を行いました。部会員である肥育農家が飼料給与試験を数年かけて行い、肉質等に影響がないことを見極めながら、新たに飼料給与体系を確立しました。したがって、今回の高騰を受けて、部会としてまた農家として、できる手だてがないのが実態です。また経営改善には継続的・意識的に取り組んできており、所得ロスを大きく減らせる状況にありません。自経営をみても、今年度に入ってから資金繰りが厳しくなってきたと感じており、今後は資金繰り確保が重要と考えています。

2019年に法人化し、1,000頭超へと経営規模の拡大を具体的に進めようと計画していました。その矢先の、コロナ禍、飼料高ですが、今できることは販売強化だと考えています。肥育部会として、今年度から新たな消費地市場に出荷することができるようになりました。また地元の佐賀県食肉センターからの輸出も可能となる見込みです。今後の経営にとって明るい材料だと考えています。

(みやざき ようすけ)